『水滸傳』征遼故事の成立背景

――「宋代忠義英雄譚」を核とする作品形成――

馬場昭佳

はじめに

『水滸傳』[1]第八十三回から第八十九回には、朝廷に歸順した宋江が最初の任務として北方の夷狄の强國遼を征伐する物語、すなわち「征遼故事」が見られる。宋の正規軍となった宋江率いる梁山泊集團は、遼の支配する都市を次々と攻略し、最後には遼を降伏させるに至った。梁山泊集團の勝利に終始する征遼故事は、『水滸傳』の中でも彼らの强さが際立って描かれている部分と言えるだろう。だが後述するように、その內容があまりに粗雜であることから、『水滸傳』の基本構成が完成した後に加えられた蛇足という印象を持たれてしまい、その成立に關する研究も意義あるものとは認められてこなかった。

征遼故事が文學性に乏しいことは否定できないが、その『水滸傳』における意義を鑑みると、單なる蛇足として片付けてしまうわけにはいかない。遼の討伐は宋江が朝廷に歸順してから最初に與えられる任務であり、その心に强く抱いている朝廷への忠義を初めて具體的な行動で示せる絕好の機會となっている。つまり征遼故事は『水滸傳』の重要概念と目される忠義と深く關わっているとも言えるのである。物語として魅力に缺けるという理由のみによって、その創作要因も取るに足りないと決めつけてしまうのは短絡的であろう。征遼故事の成立は『水滸傳』全體の構成の成立と關連づけて考察する必要があるのではないだろうか。

本稿は『水滸傳』の征遼故事の成立について、作品全體の成立過程を念頭に置きながら檢討するものである。『水滸傳』の前史である史實や物語群の性質、及び同時代の他の通俗文藝作品の特徵を考察することによって、『水滸傳』の基本構成が形成される過程でその不可缺の要素として征遼故事が作り出されたことを明らかにしたい。さらに征遼故事の成立背景に見られる現象が、中國小說史における物語創作意識の或る變化を最初に具現化したものであることにも言及したい。

本論に入る前に、征遼故事に對する從來の評價とその成立に關する先行研究について確認しておく。

これまで征遼故事は、「既無歷史的根據、又無出色的寫法、實在沒有什麼價值。（歷史的な根據もなく、突出した描寫もないため、見るべき價値は全くない）[2]。」、「ほかの部分と話がつながらない。必然性

がない。登場人物がふえも減りもしないのも不自然だ。とりはずしてもいっこうさしつかえない。いやとりはずしたほうが自然である。その上、水滸傳はおもしろいのに、この部分は話もつまらないし文章も劣る。[3]」などのように、概ね手厳しい評價を受けてきた。その原因は、物語の内容、『水滸傳』内での位置づけ、他の通俗文藝作品との關係、の三點から擧げられる。

第一點は物語内容そのものにリアリティが著しく缺けている點である。大規模な戰爭を行っているにも關わらず、梁山泊集團は一〇八人の好漢に死者を全く出さずに一方的に勝利を重ねる、という不自然かつ單調な展開が征遼故事の基底を成している。このほか、遼側の登場人物が全て架空の存在、南方から攻める梁山泊集團が北から南に進軍するという單純な地理の錯誤など、個別の要素でも不自然な點が目立つ。第二點は讀み飛ばしても支障がないエピソードと見なせてしまう點である。これは征遼故事において梁山泊集團が實質的にほとんど變化しないからである。そして第三點は他の物語からの借用が確認できる、つまり獨創性が認められない點である。中鉢雅量氏の考察によると、征遼故事は全體的に『楊家將演義』もしくはその前身の物語を下敷きにして作られている。[4]

以上のうち特に第二點の原因によって征遼故事は、梁山泊に集結した一〇八人の好漢が朝廷に歸順して方臘討伐に赴くという『水滸傳』の基本構成が形成された後に付加された蛇足と見なされてきた。[5]よってその成立の解明も、あまり研究意義がないと考えられてきた。征遼故事の成立に關する先行研究は多くなく、以下の二種類にまとめられるが、いずれも妥當性に問題がある。

一つは、當時の漢人の民族的敵愾心の表れとするものである。[6]宋から明にかけて漢人が遼・金・元といった北方の遊牧民勢力の脅威に惱まされ續けた歴史狀況を鑑みると、その積年の鬱憤を晴らすために作られたという說明は的確なように思われる。しかしこれには明確な反證を示すことができる。遼側が宋江を味方に引き込もうと暗に接觸してきた際に、梁山泊集團の軍師吳用は宋の朝廷が奸臣に牛耳られている實情を憂えたうえで、

若論我小子愚意、從其大遼、豈不勝如梁山水寨。[7]只是負了兄長忠義之心。（愚見を申し上げますと、遼に從うのは、梁山泊の水寨にいるより惡いことはないでしょう。ただしそれでは兄者の忠義の心に背くことになってしまいます。）（第八十五回）

という私見を述べている。結局は宋江の意向に從って遼と戰い續けるのだが、吳用が遼への從屬に全く抵抗を感じていないことは明らかである。梁山泊集團の中心人物にこのような見解が見られるため、漢人の民族感情を要因とする說には首肯できない。[8]

もう一つは、梁山泊の好漢の一人で超人的な魔法使いである公孫勝のための花道とするものである。宮崎市定氏は征遼故事の直後に公孫勝が仲間から離れること、及びその後の方臘討伐で好漢たちが次々と戰死することに注目した。そして公孫勝を方臘討伐の前に十分に活躍させて物語世界から都合よく退場させるために、征遼故事がその活躍の場として作られたという說を提示した。[9]しかしこの說では、なぜ征伐對象が遼なのかという根本的な疑問を解決できない。公孫勝が戰爭で大活躍すればよいのであれば、その敵は遼でなくてもかまわなくなってしまう。

結局のところ征遼故事は、『水滸傳』の鑑賞と研究のいずれの領域においてもほとんど價値を認められてこなかったと言えよう。

第一章　『水滸傳』前史――盜賊の武勇傳

周知のように、『水滸傳』は明代の或る一時期にその全ての內容が創作されたものではない。北宋末期に宋江が盜賊として活動したという史實に端を發し、講談や戲曲など通俗文藝の世界において梁山泊の豪傑たちの物語（以下「梁山泊故事群」）として次第に洗練が加えられた後、最終的に明代に白話小說として集大成したものである。ただし宋江率いる盜賊團の性質やその活動內容は、長期にわたる變遷を經るうちに變化していった。

本章では『水滸傳』の前史に注目し、史實における宋江の活動及び梁山泊故事群の內容についてそれぞれ整理して、これと征遼故事との關係について考えてみたい。

（一ノ一）史實――機動的な盜賊團

『宋史』や『東都事略』などの歷史書からは、『水滸傳』の主人公宋江に關する事績を斷片的ながらも見つけることができる。その記述の大半は、宋江が北宋末の宣和年間（一一一九～一一二五）に山東・河北・淮南など中國東部で略奪を繰り返す盜賊であったことに集中している。

宣和元年十二月、詔招撫山東盜宋江。（宣和元年十二月、山東の盜賊宋江を招撫する詔敕を出した。）（『皇宋十朝綱要』卷十八）

（宣和三年二月）淮南盜宋江犯淮陽軍、又犯京東河北、入楚海州。……五月丙申、宋江就擒。（宣和三年二月、淮南の盜賊宋江が淮陽軍を荒らし、また京東や河北を荒らして、楚州・海州（現在の江蘇省北部）に入った。……五月丙申、宋江が捕まった。）（『東都事略』卷十一）

しかし山東一帶で活動していたことから、史實の宋江も梁山泊を據點としていたと考えるのは早計である。歷史書には宋江が梁山泊に據っていたどころか、根城をどこかに設けていたとすら記されていない。このことは、史實の宋江が一定の地域を支配して恣に振舞ったのではなく、金品や食料を求めて各地を轉々としたことを示しているだろう。

宋江が頻繁に移動を繰り返したことは、彼が率いる盜賊集團の構成人數を鑑みるとより理解できる。その規模は、宣和三年五月丙申に宋江が捕まった具體的經緯から推測できる。

會劇賊宋江剽掠至海、趨海岸、劫巨艦十數。叔夜募死士千人、距十數里、大張旗幟、誘之使戰。密伏壯士匿海旁、約候兵合卽焚其舟。舟旣焚、賊大恐、無復鬪志。伏兵乘之、江乃降。（盜賊の宋江が略奪を行って海州に侵入し、海岸に向かい、十數艘の大船を奪った。そこで張叔夜は決死の兵士千人を募り、十數里離れた場所で仰々しく旗を掲げ、宋江を誘き出して戰った。一方で密かに兵士を海岸に伏兵として潛ませ、戰鬪の始まりを合圖にして賊の船を燒き拂った。船が燃えると、賊は恐慌狀態に陷り戰意を失くした。伏兵がこの隙に乘じて攻擊したので、宋江は投降した。）（『東都事略』卷一百八）

宋江集團は、知海州という一地方の長官にすぎない張叔夜が動員した千人ほどの兵士によって制壓されてしまった。陽動作戰に乘せられてしまった點を考慮しても、その規模はあまり大きくなかったと言えるだろう。少なくとも『水滸傳』で描かれているような、遼や方臘の大軍と互角以上に戰えるほどの巨大な集團であったとは考えがたい。

さて宋江は朝廷に降伏した後、江南で起きた方臘の反亂の鎭壓に赴

いた。

宣和二年、方臘反睦州、陷溫台婺處杭秀等州、東南震動。以貫爲江浙宣撫使、領劉延慶、劉光世、辛企宗、宋江等軍二十餘萬往討之。（宣和二年、方臘が睦州で反亂を起こし、溫州・台州・婺州・處州・杭州・秀州などの州を陷落させ、東南地方は混亂した。そこで皇帝は童貫を江浙宣撫使に任じ、劉延慶、劉光世、辛企宗、宋江ら兵二十萬ほどを率いて討伐に向かわせた。）（『三朝北盟會編』卷五十二）

ただし宋江はあくまで討伐軍の一部將として參加したにすぎない。反亂鎭壓において多少の戰功は立てているが、大局を左右するような功績は一切確認できない。そもそも宋江が方臘討伐に參加した事實自體を疑う研究者もいる。宮崎市定氏は關連史料を詳細に檢討した結果、方臘討伐に參加した將軍の宋江は盜賊の宋江とは同名異人である、という說を立てた。[10] 宋江という人物が北宋末に實際に二人いたのかという歷史學的考察は本稿では追究しないが、宋江の方臘討伐參加が信憑性に缺ける事實だと言うことはできる。このように個人として目立った業績もなく、事實かどうかも確定できないことから、宋江の朝廷における事績には關心がほとんど拂われなかったと考えられる。

ここまで述べてきたことをまとめると、史實における宋江は、特定の據點を持たず機動的に山東一帶を荒らし回る盜賊であったと推定できる。廣範圍にわたって被害を出す神出鬼沒の盜賊であったことが、朝廷側から見れば非常に煩わしい存在であったことは想像に難くない。[11] 一方で朝廷に降伏した後の事績は獨自性も信憑性も乏しいものであった。歷史書に記すに値する宋江の事績が、朝廷における沒個性的な活躍ではなく、盜賊としての特異な活動であったことは一目瞭然である。

（一ノ二）梁山泊故事群――强大な梁山泊集團

北宋末における盜賊宋江の奇拔な活動は後世の人々の興味を引くようになり、通俗文藝の世界ではそれを題材とした梁山泊故事群が創り出された。梁山泊故事群では宋江だけでなく、その部下の豪傑たちにも焦點が當てられるようになる。例えば『醉翁談錄』には盛り場で演じられていた講談の題目として「花和尙」、「武行者」などが擧げられており、『元曲選』には『黑旋風雙獻功』、『同樂院燕靑博魚』等の雜劇が收められている。

梁山泊故事群は事實を記述する歷史書ではなく、視聽する人々を樂しませる通俗文藝である。よってその內容も史實に縛られることなく、多くの脚色が施されるようになった。

史實から梁山泊故事群における變化の最たるものは、宋江率いる盜賊集團が强大になったことである。梁山泊故事群におけるその規模は、元雜劇で宋江が登場する際の自己紹介の臺詞に明示されている。

某聚三十六大夥、七十二小夥、半垓來小僂儸、威鎭梁山。（それがしは三十六人の大頭目、七十二人の小頭目、數多の手下を集め、梁山に居座っている。）（高文秀『黑旋風雙獻功』第一折）

宋江がこのように多數の手下を從えて梁山泊を根據地とする大盜賊になったのは、一つには話が流傳する過程で樣々な尾鰭が付け加えられた結果と考えられるだろうが、その直接の要因は梁山泊という土地に對する當時の人々の一般的な印象に求められる。梁山泊は沼澤に圍まれた地勢ゆえに、ならず者や盜賊たちが隱れ住む場所として有名であった。例えば『宋史』卷三百五十三「許幾傳」には、

梁山濼多盜、皆漁者窟穴也。幾籍十人爲保、使晨出夕歸、否則

以告、輒窮治無脱者。（梁山濼には盗賊が多く、漁民たちはみな隠れ家にしていた。許幾は十人を一保に組ませ、朝に出て夕方に帰るようにさせ、違反すれば罪に問い、必ず徹底的に調べ上げて見逃さなかった。）

と、當時の梁山泊（「濼」と「泊」は同義）が盗賊の棲家になっていたために、住民に對して嚴しい管理策が採られていた事情が記されている。また洪邁『夷堅乙志』巻六「蔡侍郎」には、北宋末の宣和七年に蔡居厚という者が病死後に地獄に落ちて責め苦を受けるのだが、それは彼が生前に鄆州を治めていた時に投降してきた梁山濼の盗賊五百人を殺してしまったからであった、という話が見られる。以上のような歴史書や筆記の記述から窺えるように、當時の人々の脳裏には梁山泊すなわち盗賊の巣窟という認識が形成されていた[12]。したがって山東一帯を荒らし回った有名な盗賊である宋江に、梁山泊を根城として多數の手下を従える大盗賊のイメージを重ねるのは、極めて自然な連想と言えるだろう。

以上のように梁山泊故事群には宋江集團が强大になる變化が見られる一方で、史實とはあまり變わらない面も見られる。それは宋江が朝廷に降った後の事績の位置づけである。

現在でも内容を確認できる梁山泊故事群は元雜劇を中心に十數種あるが、その中で宋江の朝廷における事績を扱っているものは二種しかない。『水滸傳』の雛型が見られる『大宋宣和遺事』[13]と、これに基づいて明代初期に皇族の周憲王朱有燉が創作した雜劇『黑旋風仗義疎財』の第四・五折[14]である。しかも絶對數が少ないだけでなく、兩者ともその記述は極めて簡潔である。

『大宋宣和遺事』において、宋江が朝廷と關わる部分は次のように記されている。

有那元帥姓張名叔夜的、是世代將門之子。前來招誘宋江和那三十六人歸順宋朝、各受武功大夫誥敕、分注諸路巡檢使去也。因此三路之寇、悉得平定。後遣宋江收方臘有功、封節度使。（元帥の張叔夜という者がおり、代々將軍を輩出する家の子である。先に宋江と三十六人を宋朝に歸順させ、それぞれ武功大夫の詔敕を受けさせ、各路の巡檢使として向かわせた。これにより三路の盗賊は全て平定された。後に宋江を派遣して方臘を捕まえるのに功績があったので、節度使に封じられた。）

この前には宋江たちが梁山泊に集結するまでの過程が長々と語られているのだが、朝廷に關する事績はこの引用部分が全てである。朝廷への歸順と方臘討伐の參加がわずか數十字で概説されているにすぎない。

『黑旋風仗義疎財』では、第四折で朝廷への歸順が、第五折で方臘討伐がそれぞれ描かれている。雜劇一折が概ね數百字からなることから分かるように、その内容は簡潔にならざるを得ない。例えば第五折の方臘討伐は、梁山泊の各豪傑が武勇を披露して方臘を捕まえるとそのまま終わってしまう。『水滸傳』における方臘討伐が多くの戰死者を出しながら辛くも勝利した經緯を詳細に描いているのと比べると、その差は歴然である[15]。

結局のところ、梁山泊故事群は史實の延長線上にあると言えるだろう。その物語の中心は、史實と同じく宋江の盗賊としての活躍にあった。ただし宋江集團の規模は史實とは比較にならないほど强大になり、また梁山泊を據點とするようになった。一方で朝廷における活躍は盗賊宋江の單なる後日談にすぎず、依然として瑣末な事績と見なされて

いた。

（一ノ三）『水滸傳』との斷層――朝廷や忠義と無緣な宋江

ここで本稿の問題關心である征遼故事と、以上で論じてきた『水滸傳』前史との關係について考えてみたい。

史實や梁山泊故事群を見渡してみると、宋江と遼の戰いを窺わせる記述は見られない。[16] それだけではなく、遼の存在自體が宋江らの言葉や彼らを取り卷く環境にも一切現れない。宋江と遼に關係が全く見られないことから、征遼故事の直接の原型は『水滸傳』前史にはないと言えるだろう。

さらに兩者の性質を比較すると、直接の原型どころかその萌芽すら見られないとまで言い切ることができる。冒頭で述べたように、征遼故事は朝廷の一員となった宋江らの活躍を描く物語であり、忠義の精神はその動機として重要なはたらきをしている。だが史實、梁山泊故事群ともに、朝廷における事績は單なる後日談にすぎなかった。このことは、『水滸傳』前史は朝廷を對象とする忠義の精神とも無緣であることを意味する。史實では宋江の行動が記述されるだけであり、その心情については記されていない。梁山泊故事群では宋江らの心情も詳しく描かれているが、その大半を占める雜劇諸作品では笠井直美氏が論じたように、「そもそも朝廷への忠誠心が皆無である」。[17]

朝廷における事績の物語は、簡潔ながらも唯一『黑旋風仗義疎財』で確認できた。しかし劇中の宋江らは朝廷に無關心で、忠義とも無緣である。朝廷に歸順したのは自ら望んだからではなく、劇の前半で彼らが助けた李儆古という人物に次のように說得されたからである。

何不因這機會出來首官、與官裏盡忠。南征北討、得了功勞、做個大官、封妻蔭子、喫堂食、飲御酒、不强似你每那牛皮帳房裏、每日殺人、又不安穩。（どうしてこの機會に投降してお上に忠誠を盡くさないのですか。あちこちで戰って手柄を立てれば、大官となって妻子も恩惠に與るようになるし、お上から支給される飯や酒を口にできるようにもなって、あなたたちのあの牛の皮のテントで毎日殺人をして不安のまま過ごすよりずっと良くなるでしょう。）（『黑旋風仗義疎財』第四折）

しかもここで朝廷に歸順する利點として擧げられているのは、生存するうえで不安がなくなることである。受動的かつ卽物的な理由で歸順を決めた宋江らに、自發的に朝廷に盡くそうとする精神は全く見出せない。

史實と梁山泊故事群は宋江らの盜賊としての活躍に焦點を當てているが、朝廷における事績や忠義の精神にはほとんど關心が拂われていない。一方で『水滸傳』の征遼故事は朝廷に仕えた宋江がその忠義を實踐する絕好の機會であった。このように兩者では宋江の活動の性質が根本的に異なっているのである。したがって征遼故事が『水滸傳』前史から生み出される可能性は皆無に等しい。

第二章　通俗文藝世界における「宋代忠義英雄譚」

當然のことだが、『水滸傳』の內容の全ての原型をその前史のみに求める必要は全くない。そもそもあらゆる文學作品は、政治情勢や社會風俗など樣々な事象を反映して創り出されるものである。征遼故事の端緒を『水滸傳』前史に見出せないならば、史實や梁山泊故事群を取り卷く環境に手掛かりを求めるべきだろう。

ここで、『水滸傳』が前史の段階から北宋初期の英雄一族楊家將に關する故事群（以下「楊家將說話」[18]）と關係が深いことに注意したい。[19]特に注目したいのは、冒頭において征遼故事が低く評價される原因の第三點すなわち獨創性に缺ける點で言及した、征遼故事が楊家將說話を下敷きにして作られたという中鉢雅量氏の考察である。中鉢氏は兩者の影響關係の解明を目的としており、この關係が生じた背景にまでは言及していない。だが征遼故事の成立が楊家將說話と密接に關わっていることは明らかである。したがって楊家將說話の特徵とその通俗文藝における位置づけを明らかにすれば、征遼故事の成立を解明するための大きな手掛かりが得られるはずである。

本章ではまず明代以前における楊家將說話の構成について分析し、次に同樣の構成が南宋初期の英雄岳飛に關する故事群（以下「岳飛說話」）にも見られることを論じ、最後に兩說話に共通する構成を抽出してその特質について考えてみたい。

（二ノ一）楊家將說話の構成

楊家將說話は、北宋初期に楊繼業（または楊業）とその子楊六郎（名は延昭、もしくは延景）を中心とする楊一門及びその配下の武將たちの活躍を題材にしたものである。その源流は史實にまで遡ることができ、『東都事略』や『宋史』などの歷史書には山西一帶における對遼最前線を防衞する將軍として楊繼業父子の事績が記されている。

楊一門の活躍は、同じ北宋の時代から早くも人々の關心を引きつけていた。歐陽脩「供備庫副使楊君墓志銘」には、

君之伯祖繼業、太宗時爲雲州觀察使、與契丹戰役、贈太師、中書令。繼業有子延昭、眞宗時爲莫州防御使。父子皆爲名將、其智勇號稱「無敵」。至今天下之士至於里兒野豎、皆能道之。（貴方の大伯父の楊繼業は、太宗の時に雲州觀察使になり、契丹と戰い、太師、中書令を賜った。楊繼業には延昭という子がいて、眞宗の時に莫州防御使になった。父子ともに名將であり、その智勇は「無敵」と稱された。今や天下の士人から田舍の子供に至るまで、皆その活躍を語ることができる。）（『居士集』卷二十九）

と記されており、樣々な階層の人々が楊一門の活躍を知っていた樣子が窺える。また『醉翁談錄』には「楊令公」や「五郎爲僧」など楊業や楊六郎の兄楊五郎の活躍を扱った講談の題目が見られ、通俗文藝の題材として早い時期から取り上げられていたことも分かる。[20]

ここでは楊家將說話の代表として、『元曲選』に收められている雜劇『昊天塔孟良盜骨』（以下『孟良盜骨』）と『謝金吾詐訴淸風府』（以下『謝金吾』）を取り上げたい。[21]まずは兩作品の內容を簡單に說明しよう。

『孟良盜骨』は、遼國內の昊天塔で晒されている楊業の遺骨を楊六郎とその部下孟良が取り返す話を描く。事の發端は、遼との戰爭で死んだ楊業の靈魂が楊六郎の枕元に現れ、自分の骨を取り戻してほしいと訴えたことにある。遼國に忍び込んだ楊六郎と孟良は、知惠をはたらかせて楊業の遺骨の奪還に成功した。さらに遺骨を再び取り返そうと追擊してきた遼の軍隊も擊退した。

『謝金吾』の粗筋は以下のとおりである。宋の樞密使王欽若は、實は宋朝における楊一門の影響力を除くために遼から送り込まれたスパイであり、女壻の謝金吾と結託して楊家が朝廷から賜った京城の邸宅淸風無佞樓を取り壞した。事情を知った楊六郎は無斷で對遼最前線の任務地を離れて京城に入ったが王欽若に捕まり、また楊六郎に同行し

た部下の焦贊も怒りに任せて謝金吾一家を皆殺しにしたために捕まってしまった。王欽若は二人とも死刑に處そうとするが、彼が遼のスパイである證據を孟良が入手したことにより事態は一轉する。王欽若が處刑される一方で楊六郎らは赦免され、清風無佞樓も再建された。

次に兩作品の構成について見てみたい。ともに物語の主軸は、楊一門とその部下たちが遼と戰って勝利することにある。『孟良盜骨』では物語の背景として楊業と遼との戰いがある。楊業は志半ばで戰死してしまうが、楊六郎らはその遺骨を遼から取り戻すことができた。また楊六郎らが實際に遼軍との戰鬪に勝利する場面も見られる。『謝金吾』では直接の戰鬪描寫こそないが、楊六郎と遼のスパイ王欽若との爭いが中心になって物語が展開し、王欽若が處刑されることで決着がつく。兩作品とも最後には、楊一門が遼に勝利したことによって宋朝に平和がもたらされたことが高らかに謳われる。

楊一門がこのように遼と戰うのは、ある强い心情が動機としてはたらいているからである。その心情とは、一族が結束して朝廷に貢獻する忠孝の精神である。楊六郎は劇中で初めて登場する際に、

父兄爲國行忠孝、敕賜清風無佞樓。（私の父や兄弟は國のために忠孝を行ったため、朝廷から清風無佞樓を賜った。）（『孟良盜骨』第一折、及び『謝金吾』第二折）

と、これまで自分の一族が擧げた功績を朝廷への貢獻という觀點から紹介している。この一族の血を繼ぐ楊六郎の劇中での活躍は、最後に皇帝から稱えられることになる。

楊延景全忠全孝、捨性命苦戰沙場。（楊六郎は忠と孝のかたまりであり、命を賭けて戰場で戰った。）（『孟良盜骨』第四折）

楊六郎合門忠孝、焦光贊俠氣超羣。皆是我天朝名將、加服色竝賜麒麟（楊六郎一門は皆忠孝であり、焦贊の俠氣は竝外れている。皆我が宋朝の名將であり、褒美を加えるとともに後世まで名聲を稱える。）（『謝金吾』第四折）

つまり孝に厚い楊一門の朝廷への忠義は、自他ともに認める美德となっているのである。

ただし楊一門の華々しい活躍は全く障害なしに遂行されたわけではない。同じく宋朝に仕えながら自己保身に執着し、楊一門の活躍に强い危機感をつのらせて彼らの抹殺を圖る奸臣が敵對者として立ちはだかるからである。『孟良盜骨』では第一折の楊業の靈魂の話において、彼と奸臣潘仁美との對立が語られている。楊業は潘仁美の謀略によって虎口交牙谷で遼軍に包圍されてしまう。救援を要請するために本營に向かわせた七男の楊延嗣は潘仁美に殺されてしまい、楊業自身も結局は萬事休して李陵碑に頭を打ちつけて壯絶な最期を遂げた。ここで楊業とともに登場する楊延嗣の靈魂は、

只恨那潘仁美這個姦賊、逼的俺父子竝喪番地。（ただ憎らしいのは奸賊潘仁美が、我ら親子ともども異國の地で死に追いやったことだ。）

と、潘仁美への激しい恨みを吐露している。『謝金吾』では遼のスパイとして宋朝から楊一門の勢力を排除しようと畫策する王欽若がまさに奸臣として振る舞っている。この二人の奸臣の暗躍により、楊業と楊延嗣は實際に命を落とし、楊六郎も處刑される寸前まで追い詰められている。

ここまで擧げてきた楊家將說話の特徵は、次の三點にまとめられるだろう。第一に、楊一門とその配下の豪傑たちが北方の夷狄の强國遼を打ち破る。第二に、その精神的な背景には結束の强い一族による宋

朝への忠義が見られる。そして第三に、朝廷内で暗躍する奸臣によって命を狙われ、中には命を失う者も出た。

楊家將說話はこの三點の要素によって人々の關心を引きつけたと言えるだろう。物語の中核は、忠孝の精神を持ち合わせる英雄とその配下の豪傑たちが力を合わせて外敵を倒すという勇ましい經緯にある。しかし決して彼らの智勇のみが一面的に强調されているわけではない。奸臣の妨害によって命を奪われる危險性が常に背後に潛んでいるからである。このような緊張感が背景にあることにより、かえって楊一門の活躍は命懸けのものとして際立つことになり、聽衆や觀客も懸命な楊一門に容易に感情移入できるようになるのである。

（二ノ二）岳飛說話との共通性

楊家將說話は宋代以降の通俗文藝の世界において盛行していた英雄物語の一つであるが、當時は他にも多くの英雄物語が人々に親しまれていた。例えば三國時代の關羽、唐代の尉遲敬德、五代の李存孝などの活躍を題材にした物語は、それぞれ楊家將說話とは時代背景も物語構成も異なっているが、英雄の個性とその獨特の活躍によって好評を博していた。ただし當時演じられていた英雄物語の中には、楊家將說話とよく似た構成を持つものも見出すことができる。それは南宋初期の名將岳飛の活躍を描いた岳飛說話である。

岳飛說話も起源は史實に遡れる。『宋史』などの歷史書によると、岳飛は南遷した宋朝の復興のために楊么など國內の反亂勢力や北方より侵略してくる金を破って多大な功績を擧げたが、金との和平を志向する宰相秦檜に疎まれ、その謀略にかかって非業の死を遂げた。通俗文藝における岳飛說話は、この秦檜による謀殺を基にして發展したものであり、雜劇『地藏王證東窓事犯』や小說『大宋中興通俗演義』などの作品が作られた[22]。

岳飛說話と楊家將說話は同じ宋代の事象を描いているが、北宋初と南宋初で時期が大きく隔たっており、內容に直接的な關係もない。それにも關わらず岳飛說話の物語構成を見てみると、楊家將說話と同樣の構成要素を確認することができる。

まずは北方の夷狄の强國と戰って勝利する點である。岳飛說話においてその敵國は遼ではなく長江以北を制壓した金であるが、遼も金も北方から宋に壓力をかけた夷狄の强國という點で大差はない。南進してくる金軍に對して、岳飛は部下の牛臯らと協力しながらたびたび勝利を收める。最終的には金軍の南下を押し返し、かつての北宋の首都汴京に迫るまでに至った。

夷狄の强國と戰う精神的背景としての朝廷への忠義は、岳飛の場合さらに鮮明になっている。この事情を端的に表しているのが、背中に「盡（精）忠報國」の四字を刻むことで自らの忠義の志を可視化させたという逸話である。ほかにも岳飛は宋朝への忠義を樣々な場面で表明している。

> 今日只要掃蕩胡虜、迎還二聖、復其舊日江山、以報國家。此乃是我平生之願。（今はただ夷狄を追い拂って徽宗・欽宗の二帝をお迎えし、かつての領土を取り戻して國家に報いることだけを望んでおります。これこそが私の一生の願いです。）（『大宋中興通俗演義』卷二「岳飛計畫河北策」）

このような忠義の主張は、後の時代の作品になるほど純粹になる傾向がある[23]。

そして岳飛の活躍を妨害する奸臣は、秦檜がその役割を擔っている。

秦檜は南宋の領土回復を目的とする岳飛の活躍に強い危惧を感じていた。岳飛が汴京一帶まで金軍を撃退すると、秦檜は岳飛を戰場から都に強引に召還し、罪を捏造して殺してしまった。この秦檜による岳飛の謀殺は、岳飛說話の現存最古の物語である『地藏王證東窓事犯』からその核心となっている。

以上のように、楊家將說話の特徵の三點の要素はいずれも岳飛說話においても確認できた。ただし楊家將說話とは要素の重點の置かれ方は異なっている。楊家將說話では遼を打ち破ることが主軸であり、また一族の物語であるゆえに孝の精神も强調されているのに對して、岳飛說話では奸臣による謀殺が根幹をなしている。無類の忠義の精神と失地回復も實現し得る能力の持ち主でありながら、奸臣の毒牙にかかって非業の死を遂げてしまう。この著しい不條理から生じる悲劇性が、岳飛說話を數ある英雄物語の中でも共感を强く覺えさせるものにしているのであろう。

(二ノ三)「宋代忠義英雄譚」の構成と魅力

楊家將說話と岳飛說話は明代以前の通俗文藝の世界においてそれぞれ盛んに演じられていたが、內容の異なる別個の英雄物語である。だが兩者には共通する物語構成が確認できた。その三點の構成要素は、以下のように歸納できる。

第一點は、主人公の英雄が配下の豪傑たちと協力して北方の夷狄の强國と戰い、勝利を收めることである。その個々の戰鬪場面では、英雄たちの智謀や武勇が具體的に描かれている。第二點は、英雄が朝廷に對して忠義を抱いていることである。これは英雄が高潔な人物であることを示すと同時に、夷狄の强國と戰う動機にもなっている。そして第三點は、朝廷內での敵對者として奸臣が立ちはだかることである。朝廷による統治の安定という公的な目標を實現しようとする英雄とは異なり、奸臣は自己保身という私利私欲のために英雄を亡き者にしようと畫策する。その結果は往々にして英雄の死という悲劇を招くことになる。

以上の三點の要素からなる物語構成を「宋代忠義英雄譚」として定義したい。この「宋代忠義英雄譚」には聽衆や觀客の共感を引き寄せる魅力が備わっている。英雄の優秀な活躍や高潔な精神という肯定的な極と、奸臣による妨害や謀殺という否定的な極が、一つの物語內で共存していることによって强い緊張感が生まれ、そこに人々が强く引き込まれるのである。物語の趣向という觀點から見ると、楊家將說話と岳飛說話は大きく異なっている。楊家將說話では英雄による夷狄の擊破という肯定的な極に、岳飛說話では奸臣による英雄の謀殺という否定的な極に比重が置かれている。しかしそれぞれの趣向が、もう一方の極によって裏打ちされることで人々の共感を引き込む强い緊張感を備えているという點では相違はない。

「宋代忠義英雄譚」の各要素は、北方の夷狄の强國という宋代獨自の事情を除くと、決して楊家將說話と岳飛說話に特有のものではない。例えば忠義の要素ならば、「五關斬將」故事において一時的に曹操に仕えていた關羽が劉備のもとへ戻ることで絕對的な忠誠を貫き通したことにも見出せる。[24] また優秀な活躍と悲慘な最期という二極の對比によって人々の共感を得ている英雄物語もある。元代に刊行された『前漢書平話』などに見られる、漢の建國に大いに貢獻したが高祖に疎まれて殺されてしまった韓信の物語はその好例であろう。

ところが、複數の要素からなる物語構成までもが二つの說話で一致

する例は他には見られない。しかも楊家將說話と岳飛說話は決して同類とは見なされず、異なる內容や趣向によってそれぞれ盛行していた。これは「宋代忠義英雄譚」という物語構成が通俗文藝の世界において魅力的な物語の型の一つとして作用していたことを證明しているだろう。

第三章　「宋代忠義英雄譚」として必要とされた征遼故事

通俗文藝の世界において「宋代忠義英雄譚」の構成を有する作品は、楊家將說話と岳飛說話のほかにも存在する。それは『水滸傳』である。

まず北方の夷狄の强國に勝利する點は、征遼故事が正にこれに該當する。冒頭で述べたように、征遼故事において宋江率いる梁山泊集團は次々と遼軍を擊破し、最終的には遼を降伏させるに至った。

次に朝廷への忠義は、宋江が平生から心に强く抱いているものであり、その言動の端々に見取ることができる。宋江は梁山泊に投じる前にも、盜賊に身をやつさざるを得なくなった武松に向かって、

如得朝廷招安、你便可擡掇魯智深、楊志投降了。日後但是去邊上、一鎗一刀、博得個封妻蔭子、久後靑史上留得一個好名。（もし朝廷から招安を受けたら、魯智深と楊志を誘って投降しなさい。後にたとえ邊境へ行っても槍働きで功績を擧げれば、妻子も恩惠に與り、久しく歷史書に良き名を殘すことができるでしょう。）（第三十二回）

と、朝廷に仕えて盡力することが最善だと諭している。また朝廷に歸順した後も、

縱使宋朝負我、我忠心不負宋朝。久後縱無功賞、也得靑史上留名。（たとえ宋朝が私に背いたとしても、私の忠心は宋朝に背かない。後にたとえ褒賞が下されなくとも、歷史書に名を殘すことはできよう。）（第八十五回）

と、見返りを求めることなく朝廷に忠義を盡くす態度を度々表明している。このような宋江の愚直なまでの忠義の精神は、『水滸傳』の多くの版本の題名が「忠義水滸傳」、「忠義水滸全書」のように「忠義」の語を冠していることからも窺えるだろう。

そして宋江の活躍を妨害する奸臣は、高俅・蔡京・童貫・楊戩の四人によって擔われている。この四人は、實直な忠義を抱く宋江の活躍が自分たちの地位を脅かしかねないと强く警戒していた。よって初めは宋江の朝廷への歸順を阻止しようと策を巡らせた。その陰謀が盡く失敗に終わり、宋江が朝廷の一員となって活躍した後は、掌握している人事權を惡用してその功績に全く見合わない低い官職しか與えなかった。最後には、後顧の憂いを絕つために宋江を毒殺してしまった。

以上のように『水滸傳』にも「宋代忠義英雄譚」の構成が確認できる。しかし作品の變遷史に注目すると、同じ構成を有する楊家將說話や岳飛說話とは決定的な相違も見出せる。第二章で見たように、兩說話は早い時期から「宋代忠義英雄譚」として演じられていた。一方『水滸傳』は、小說以前の段階ではこのような物語として流通していたわけではない。これは、征遼故事が『水滸傳』前史に由來しないという第一章の考察結果と同じ理由から說明できる。史實や梁山泊故事群においては宋江の盜賊としての活躍が中心であり、朝廷における活躍はあくまで後日談にすぎなかったからである。さらに梁山泊故事群は個々の豪傑の活躍を描く短編が主であり、體系的な說話としてはほとんど確立していなかった。

『水滸傳』とその前史の關係、及び通俗文藝世界の情勢を總合的に考え合わせると、梁山泊故事群から『水滸傳』へと進展する過程において、魅力的な物語の型である「宋代忠義英雄譚」を中核にして故事群を編集するという物語の本質に關わる大轉換が行われたと想定すべきではないだろうか。

このような大轉換が行われたのは、單に「宋代忠義英雄譚」が人々の強い共感を呼び込む物語構成であっただけではない。「宋代忠義英雄譚」の要素と解釋し得るものが『水滸傳』前史とその關連事情に備わっていたからである。

朝廷への忠義という要素は、宋江の行動から導き出せる。史實や梁山泊故事群には、宋江が朝廷に降って方臘討伐に參加するという後日談が確認できた。この部分は絶對的分量が少なく、事實を簡潔に記すのみであるため、宋江が朝廷に對してどのような感情を抱いていたのかは明記されていない。しかしその動機として朝廷への忠義があったと想像することは、ごく自然な發想と言えるだろう。

英雄の活躍を妨害する奸臣という要素は、『水滸傳』前史に直接の手掛かりはない。だが宋江が活躍した北宋末の史實に注目すると、この時期には國を內部から腐敗させた奸臣がいると考えられていた。その代表的人物が蔡京と童貫である。例えば『宋史』卷二十二「徽宗本紀」の贊には、

跡徽宗失國之由……特恃其私智小慧、用心一偏、疎斥正士、狎近姦諛。於是蔡京以獧薄巧佞之資、濟其驕奢淫佚之志。溺信虛無、崇飾游觀、困竭民力、君臣逸豫、相爲誕謾、怠棄國政、日行無稽。及童貫用事、佳兵勤遠、稔禍速亂。（徽宗が國を滅ぼした理由は、……ただ己のわずかな知惠を恃みにして偏った配慮しかできず、正義の士を退けて媚び諂う輩と親しんだことにある。そこで蔡京は上邊と口先だけの性格で、徽宗の奢侈に耽る心を助長させた。道敎に溺れ、居宅を飾り立て、民の力を弱らせたが、君臣は安樂に耽って共に驕り昂ぶり、國政を放棄して日々でたらめなことをしていた。そして童貫は戰爭を始め、好戰的に遠征を繰り返したため、災いを生み出し混亂に拍車をかけた。）

と、蔡京と童貫の暗躍が北宋滅亡の主要因であると記されている。また高俅と楊戩もこの二人に與した人物であった。

以上のように、「宋代忠義英雄譚」のうち忠義と奸臣の要素は『水滸傳』前史とその時代背景から導き出すことができる。しかし北方の夷狄の强國と戰って勝利を收めるという要素すなわち征遼故事は、第一章で論じたように、史實と梁山泊故事群に手掛かりは全く求められなかった。ちなみに史實の北宋末において、宋が遼に戰爭を仕掛けた事實が確認できる。この戰爭は方臘の反亂を鎭壓した後に行われたが、宋江は全く關わっておらず、しかも結果は宋の大敗に終わっている。これでは夷狄に勝利するという要素の參考にはならない。

ただしこの要素は「宋代忠義英雄譚」の基礎をなすものであり、梁山泊故事群がそのような構成の物語に變貌するためには必要不可缺であった。したがって梁山泊故事群と關係の深い楊家將說話からプロットを借用して新たに物語を作り出すことで、その缺如を取り繕ったのであろう。

要するに『水滸傳』の征遼故事は、梁山泊故事群が本質的に大きく轉換する際に、中核とした「宋代忠義英雄譚」の構成要素のうち夷狄を打倒する要素を獨自に創れなかったため、楊家將說話を參考にして作り出された物語なのである。ただし創作要因の壯大さはその內容の

出來を一切保證するものではない。「宋代忠義英雄譚」の一要素として必要に迫られて捻出された征遼故事は、冒頭で見たように、『水滸傳』の蛇足と見なされるに至った。

終わりに

『水滸傳』の征遼故事が成立する背景には、梁山泊故事群が「宋代忠義英雄譚」を核にして體系的な物語へと變貌する本質的大轉換の過程を見出せた。この過程は、征遼故事を含めた『水滸傳』全體が既存の通俗的な物語に基づいていることを表している。

最後に、この現象の中國小說史における意義について少し考えてみたい。

既存の作品に基づいて新しい作品を創りだす技法は、小說以外の分野では古くから見られるものである。例えば詩の世界における典故表現はその好例であるし、戲曲の世界でも『西廂記』の改變などがその例として擧げられよう。だがここで創作の基礎となるのはあくまで文人たちにその價値を認められたものに限られる。通俗文藝の物語內容は明代以前に他の作品の基礎として用いられることはなかった。

一方で白話小說には通俗文藝の物語內容に基づいて創作された作品を多く見出せる。その中でも傑作といえるものが『金瓶梅』であろう。『金瓶梅』は『水滸傳』の武松の物語に基づきながらも完全に獨自な作品に仕上がっている。その價値は『水滸傳』と等しく「四大奇書」の一つと評されるに至った。

また白話小說の續書も同樣の手法で作られたものと見なせる。例えば『水滸傳』の續書は『水滸後傳』、『蕩寇志』などが刊行されており、『紅樓夢』では數十種にも上る續書が作られた。作品の完成度という點から見ると、個々の續書の文學的價値は決して高くない。しかしこのような續書が特に淸代に大量に出版されたという事實は、先行する通俗的な物語の內容に基づく物語創作の手法が白話小說創作の一つの潮流となっていた事態を窺わせる。[25]

以上から、白話小說の登場とともに物語創作の意識に大きな變化が生じたと言えるだろう。從來は鑑賞されるのみであった通俗文藝作品が、白話小說においては新たな內容の物語を生產する基礎として作用しているのである。

この物語創作意識の變化を踏まえて本稿の考察結果を見てみると、梁山泊故事群が「宋代忠義英雄譚」を核にして體系的な物語に變質したことも、既存の通俗的な物語を基礎とする物語創作の手法を用いたものと見なせるだろう。ただしその手法の性質は『金瓶梅』や續書とは大きく違っている。『金瓶梅』や續書で土臺となったのは先行作品の內容であるのに對して、梁山泊故事群が基づいたのは楊家將說話や岳飛說話の內容を構成する「宋代忠義英雄譚」という枠組みに留まっている。だが『水滸傳』は白話小說早期の作品であり、『金瓶梅』や續書とはその文學的環境が全く異なっている。梁山泊故事群が『水滸傳』に進展する途上の段階では、先行作品にこの物語創作手法で作られたものは全く存在しなかった。

このような事情を考慮すると、『水滸傳』は中國小說史における物語創作意識の變化を初めて具現化した先驅的作品として位置づけられるのではないだろうか。

本稿では征遼故事が作り出された背景に、梁山泊故事群が「宋代忠義英雄譚」を核として體系的な物語を構築する變化が起こったことを

論じた。この物語の本質に關わる變化は『水滸傳』成立過程における重大な轉換點と言えるだろう。しかしこれのみで『水滸傳』成立の全容が解明できるわけではない。

例えば征遼故事の趣向は、基づいた楊家將說話とは大きく異なっている。楊家將說話における楊一門と遼の戰いは、奸臣による妨害が背後にあることによって人々の共感を引き寄せる緊張感が生じていた。だが征遼故事は宋江らが一方的に勝利を收めるだけの單調な物語である。しかも高俅ら奸臣は、遼から賄賂を受けて休戰させたことを除くと、從軍中の宋江には危害を加えていない。このような內容の不備は、『水滸傳』が獨自性を發揮しようとして失敗した結果なのだろうか。

また方臘討伐に關する問題も看過できない。方臘討伐自體は『水滸傳』前史の段階でも確認できるが、『水滸傳』のような梁山泊集團の崩壞につながる悲劇性は一切見られなかった。つまり方臘討伐の內容も『水滸傳』の成立過程で大きく變質しているのである。あるいはここに「宋代忠義英雄譚」における奸臣による謀殺という悲劇性が强く表れているのかもしれない。

以上のような『水滸傳』成立に關する諸問題の解明は今後の課題としたい。

注

（1）本稿における『水滸傳』とは、特に注記のない限り、現存する完全な刊本の中で最も古い形態を殘していると考えられる容與堂本（全百回）の內容を想定している。テキストはその影印本『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、一九七五）を使用した。

（2）胡適「『水滸傳』後考」（『胡適古典文學研究論集』（上海古籍出版社、一九八八）八一二頁）

（3）高島俊男『水滸傳の世界』（大修館書店、一九八七）「十二、遼國征討」二二一頁。

（4）中鉢雅量『中國小說史研究――水滸傳を中心として――』（汲古書院、一九九六）一五三～一七五頁。

（5）例えば、胡適注二前掲論文、嚴敦易『水滸傳的演變』（作家出版社、一九五七）一五四～一五五頁など。

（6）例えば、魯迅『中國小說史略』（『魯迅全集』第九卷、人民文學出版社、一九八一）第十五篇「元明傳來之講史（下）」、湯國梁・周洪喜「『忠義水滸傳』征遼部分得失論」（『濟寧師專學報』一九九五年第一期）など。

（7）ちなみに容與堂本より後に刊行された『忠義水滸全書』（全百二十回）では、「棄宋從遼、豈不爲勝。（宋を見捨てて遼に從う方がよほどましです。）」のように、より直截な表現に改められている。

（8）吳用だけでなく宋江にも民族的敵愾心がないことは、中鉢注四前掲書一八六～一八七頁で言及されている。

（9）宮崎市定『水滸傳――虛構のなかの史實』（中公文庫、一九九三）第三章「妖賊方臘」六六～六八頁。同書は『宮崎市定全集』第十二卷（岩波書店、一九九二）にも所收。

（10）宮崎市定注九前掲書第二章「二人の宋江」。

（11）史實における宋江集團の性質については、中鉢注四前掲書二〇九～二一一頁參照。

（12）史實における梁山泊については、宮崎市定注九前掲書第九章「宋江に續く人々」參照。

（13）『大宋宣和遺事』自體は、歷史書や講談の種本などの記述を組み合わせて北宋末の事情を描いた通俗的な歷史讀物であり、宋末元初に作られたと考えられる。岡村眞壽美「『宣和遺事』の成立過程に關する一試論

――その歴史書引用部分をめぐって――」（『文學研究』第九十四號、一九九七）参照。

（14）本稿で用いた奢摩他室曲叢本には折の區分はないが、議論の便宜上一套數を一折に當てた。また一般に雜劇は四折構成だが、『黑旋風仗義疎財』は五折から成るという異例の形式をとっており、さらに前半三折と後半二折で内容が全く異なる。このような趣向は小松謙氏が言うように、「周憲王がしばしば行う實驗的試みの一つであろう」（「内府本系諸本考」（『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』汲古書院、一九九一）一五四頁）。なお本雜劇は萬曆年間に趙琦美が抄寫した脈望館鈔本にも收められているが、後半二折の代わりに前半三折と辻褄の合う第四折が加えられ、標準的な四折構成の雜劇に改められている。

（15）『黑旋風仗義疎財』における方臘討伐の特徴については、笠井直美「義賊の誕生――雜劇『水滸』から小説『水滸』へ――」（『東洋文化』第七十一號、一九九〇）二二〇～二二三頁参照。

（16）『宋公明排九宮八卦陣』という宋江と遼との戰いを題材にした雜劇があるが、これは『水滸傳』成立後に創られたものと考えられる。

（17）笠井直美注一五前掲論文二一九頁。梁山泊故事の雜劇において宋江たちに忠義の概念が缺如していることに關しては、同論文二一八～二二〇頁参照。

（18）本稿では「故事」という語を一つひとつの物語として、「說話」という語を或る體系を共有する故事群の總稱として用いる。先行研究での用法とは必ずしも一致しない。

（19）例えば、魯智深と楊五郎というそれぞれの主要人物の人物像が酷似する、泰山への還願という題材が梁山泊故事群と楊家將說話の雙方に見られる、など。大塚秀高「天書と泰山――『宣和遺事』よりみる『水滸傳』成立の謎――」（『東洋文化研究所紀要』第百四十冊、二〇〇〇）、陳小林「楊家將故事與水滸故事關係考述」（『殷都學刊』二〇〇八年第三期）参照。

（20）早期の楊家將說話の形成に關しては、徐朔方「元明兩代的楊家將戲曲和小說」（『戲劇論叢』第三號、一九八二）、上田望「講史小說と歷史書（二）――『北宋志傳』、『楊家將演義』の成書過程と構造――」（『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』第三輯、一九九九）、小松謙『中國歷史小說研究』（汲古書院、二〇〇一）第六章「『楊家府世代忠勇通俗演義』『北宋志傳』――武人のための文學――」参照。

（21）楊家將說話を扱った作品のうち物語として完結しているものは、明萬曆年間以降に刊行されたものしか現存していない。『元曲選』は萬曆年間の刊行で、編者臧懋循の手が加わっている可能性がある。だが『孟良盜骨』と『謝金吾』は、元代の雜劇作家とその作品について記した『錄鬼簿續編』や『太和正音譜』において題名がほぼ一致する作品が確認できる。よってこの二作品の内容は元代の時點ですでに廣く人口に膾炙していたと見なしてよいだろう。

（22）岳飛說話の形成に關しては、千田大介「岳飛故事の變遷をめぐって――鎭魂物語から英雄物語へ――」（『中國文學研究』第二十三期、一九九七）、笠井直美「〈われわれ〉の境界――岳飛故事の通俗文藝の言說における國家と民族（上）」（『名古屋大學言語文化部國際言語文化研究科言語文化論集』第二十三卷第二號、二〇〇二）参照。

（23）笠井直美注二二前掲論文参照。

（24）「五關斬將」故事は『三國志演義』成立以前から通俗文藝の世界で演じられていた。周兆新『三國演義考評』（北京大學出版社、一九九〇）一六五～一六七頁参照。

（25）白話小說において續書が大量に出版された背景については、高玉海『明清小說續書研究』（中國社會科學出版社、二〇〇四）第三章「續書現象的文化成因」参照。